

**立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトⅡ（教員・学生参加型） 2017年度研究成果報告書**

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名	
	コミュニティ政策学科・3年	小板橋美紅	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	熊上ゼミ	熊上崇	印
研究課題	コミュニティの必要性		
研究年度	2017年度		
プロジェクト 分担者	小板橋美紅、安藤卓海、伊藤悠貴、木内あこ、佐藤大介、松尾理紗子、田村涼太、谷あゆみ、星大地、坂本結衣、黒崎智樹、斎藤まお		

プロジェクトの内容及び成果の概要

東日本大震災に伴う、福島第一原子力発電所事故によって避難区域となった双葉町に焦点を当て、学習した。

一年を通して埼玉県加須市にある社協を、4回計画されていた内、3回訪問する事が出来た（4回の内1回は、台風で中止）。社協では主に、朝10時半から11半の時間帯で、体操や指のトレーニングを行った。12時頃には、一緒にお昼を食べ、その後は、福島県での当時の話や、震災後の埼玉県加須にやって来てからの生活や心の変化などをそれぞれがグループ分けされている席へと行き、話を聞かせていただいた。

夏休みに入り、夏合宿を行った際には、埼玉県加須で伺った話を、さらに発展的に「私たちが出来る事は何か、今後どのようなスタンスで被災者の方々と触れ合っていくのか」という発展的に学ぶ為に自分達の足で、福島県いわき市へ訪れた。

実施日：9月13日から14日

1日目：①双葉町社協サロン、いわき市南台で、原発事故避難者との交流

前半は、みなさんとの会話を楽しみ、加須の社協では聞けなかった、当時の心境や体力的にも辛かった避難生活の事など、生の声を聞く事が出来た。

後半は、私たちによる、「私は誰でしょう？」ゲームや、ジェスチャーなど身体を使ったレクリエーションを2つ、みなさんで行った。

②宿舎での区長からのお話

区長目線での、住民がどんな思いで被災をし、避難生活を送ったのか、また、原発は、今後私たちの生活に“絶対的”に必要なのかを考えさせられる時間となった。

2日目：①灯台訪問

灯台に登り、海の綺麗さと広さに圧巻させられた分、その海が命や、誰かの夢や未来を飲み込んでいったのだという現実を突きつけられた。

②下神白団地の自治会カフェ訪問

ここでは、埼玉県加須や1日目での社協とは違い、“今の生活”という楽しみやコミュニティの重要性を学んだ。

一年を通して、私達が学んだ2つの事、それは、1 私たち自身がその地に訪れ、話を聞き体験する事で、外部ではなく、内部である存在へと自分たち自身に変化する事、2 避難生活での苦痛を軽減させる為にも、いつ何が起こるか分からない今だからこそ事前にコミュニティを築いておく地域づくりが大切であるという事である。